第１章　土器とその移動

１．大隅諸島系土器の編年と位置づけ－共伴関係を中心に－

石堂和博　ISHIDO Takahiro
南種子町教育委員会　Minamitane Town Board of Education

１．はじめに

大隅諸島系土器は、新里貴之によって弥生時代後期～古代併行期の大隅諸島において展開する独自の土器様式の総称として提唱された用語（新里2009）で、幅広突帯・沈線文・充実脚台によって特徴付けられる土器群である。

本稿では、広田遺跡、鳥ノ峯遺跡などの埋葬址における大隅諸島系土器と搬入土器・貝製品などとの共伴関係を中心に、大隅諸島系土器の編年と位置づけについて考察したい。

２．研究史

大隅諸島系土器の研究は、薩摩式の範疇と捉えられていた輪之尾遺跡、屋久津貝塚出土の在地の甕形土器について、盛園尚孝が、口縁部の肥厚化、特徴的な突帯、箆書文などから大隅諸島に独自の土器型式と捉えたことにはじまる（盛園1955）。これらの資料に対し、盛園は、輪之尾式という型式名を与えている（盛園1961）。また、盛園は、鳥ノ峯遺跡で出土した甕形土器に対して鳥ノ峯式、広田遺跡から出土した甕形土器を広田式と型式設定し、広田式は鳥ノ峯式に後続するものと捉え、在地の甕形土器に型式変化がみられることを指摘した。それらの編年については、弥生時代中期の鳥ノ峯式、広田式、弥生時代後期の輪之尾式と並べたが（盛園1961）、後に鳥ノ峯式のうち、第１次調査出土資料を中期末、第２・３次調査出土資料を弥生時代後期から古墳時代前期に位置づけなおし、広田遺跡出土の土器（広田式）は、鳥ノ峯式の範疇に含まれるものと捉えなおしている。また、上能野貝塚が輪之尾式と同型式の単純遺跡である点を評価し、以後、輪之尾式にかわり河口の設定した上能野式の呼称を使っている（盛園1987）。

上能野貝塚の発掘を行った河口貞徳は、出土した甕形土器を上能野式と型式設定し、弥生時代後期に位置づけた（河口1973）。

旭慶男は、鳥ノ峯式について、凸帯文を有するⅠ式と凸帯文を有しないⅡ式に細分し、Ⅰ式→Ⅱ式という型式変化を想定した（旭1975）。

中園聡は、屋久島栗生中出土の甕形土器の検討から、広田遺跡下層出土土器を中津野式より新しい段階のものと捉え、古墳時代並行期にあたるとした（中園1986）。また、大隅諸島系土器の編年を示し、甕型土器１型式（高付式並行、弥生後期中葉）、甕型土器２型式（庄内式並行、弥生時代終末期）、甕型土器３型式（布留式並行）、甕型土器4型式（古墳時代並行、６世紀以前）とした（中園1988）。

橋口達也は、鳥ノ峯式をⅠ期（弥生時代後期後半）、Ⅱ期（弥生時代終末期）、Ⅲ期（古墳時代初頭）に細分した（橋口1996）。また、鳥ノ峯遺跡出土土器との比較から広田遺跡出土の甕形土器の一部について古墳時代並行期とする見解を示している。

新里貴之は、大隅諸島における弥生時代中期から古代の在地の甕形土器について、まず、文様・口

縁部形態の属性分析を行うことでＡ～Ｇ類に分類し、型式学的な序列と埋葬遺構における共伴関係からみた先後関係からＤ類を除く各類型を型式とみなし、Ⅰ～Ⅶ期に時期区分した。新里編年ではⅣ期（古）は高付式並行、Ⅳ期（新）は中津野式並行、Ⅴ期は東原式以降、Ⅴ期に後続する時期をⅥ期、そしてⅦ期を9世紀以前としている（新里1999）。のちに、新里は、概ねⅣ期（古）を鳥ノ峯式（古）、Ⅳ期（新）を鳥ノ峯式（新）、Ⅴ期を本村丸田遺跡段階（東原式並行）と椎ノ木遺跡段階（辻堂原式並行）に細分し、Ⅵ期を上能野式（笹貫式並行）、Ⅶ式が嶽ノ中野Ｂ遺跡段階（笹貫式並行）としている（新里2009）。

以上を整理すると、盛園のいう鳥ノ峯式は、中園の甕型土器１～２型式、橋口のⅠ～Ⅱ期、新里のⅣ期（鳥ノ峯式古、鳥ノ峯式新）に対応する。また、盛園のいう広田式は、概ね、中園の甕型土器３型式、橋口のⅢ期、新里のⅤ期（本村丸田遺跡）に対応し、輪之尾式（後に、上能野式）は、河口の上能野式、中園の甕型土器４型式、新里のⅥ期（上能野式）に概ね対応するとみられる。

大隅諸島系土器の器種は、大型・小型の甕形土器と小型の鉢形土器からなり、壺、高杯などは欠落する。よって、本稿では、鳥ノ峯式、広田式、上能野式の各型式について、埋葬遺構における共伴関係など一括性の高い資料を中心にして、甕形土器により型式設定し、必要に応じて、各型式を細分したい。

３．鳥ノ峯式土器

鳥ノ峯式は、盛園によって鳥ノ峯遺跡第１次調査の埋葬遺構から出土した土器を標式に設定された。その特徴について、盛園は、甕形土器が殆どで同一器形に統一され、口縁が外方に開き頸部がしまり胴部のやや張ったもので底部は揚げ底、刷け目調整があるものがあり、文様は頸部に三本の平行な沈線のあるものが普通で、これを中心にして重弧文、はりつけの凸帯文のあるもの、としている（盛園

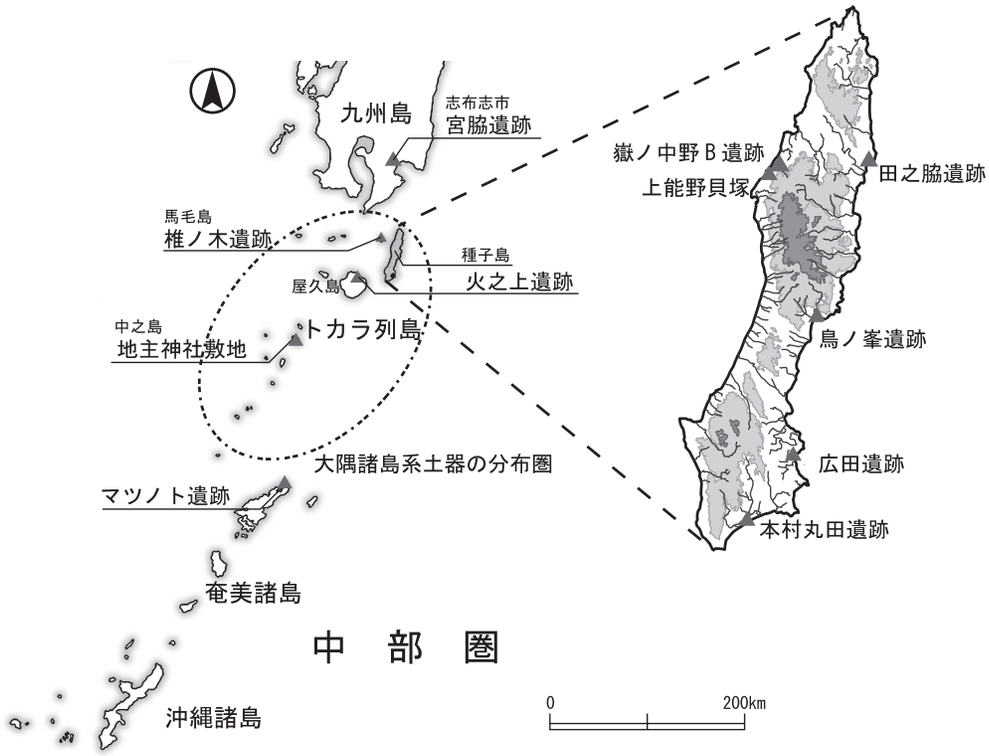

図１　本論で言及する遺跡の位置

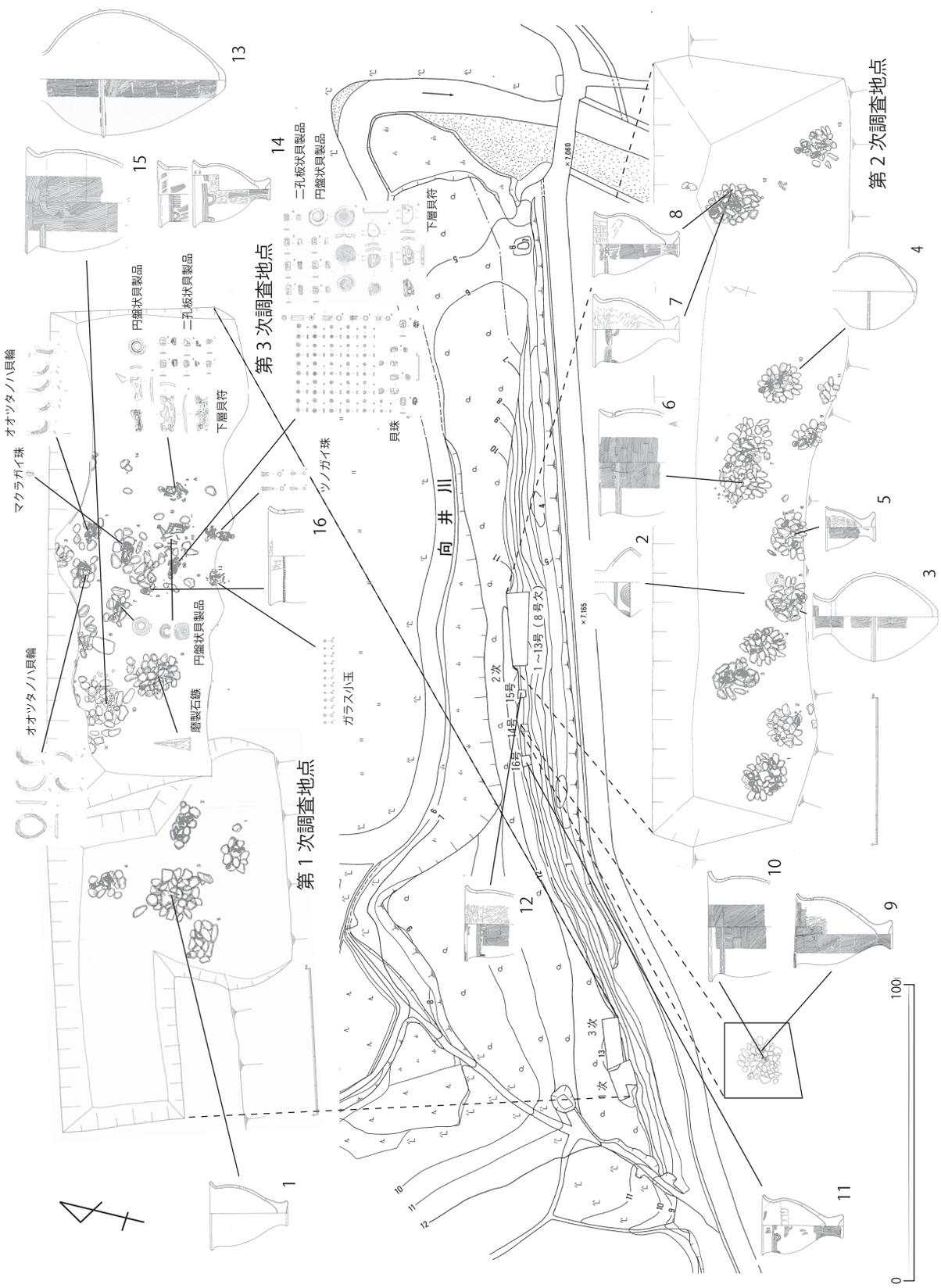

図２　鳥ノ峯遺跡第１～３次調査地点と埋葬遺構に伴う土器の出土状況

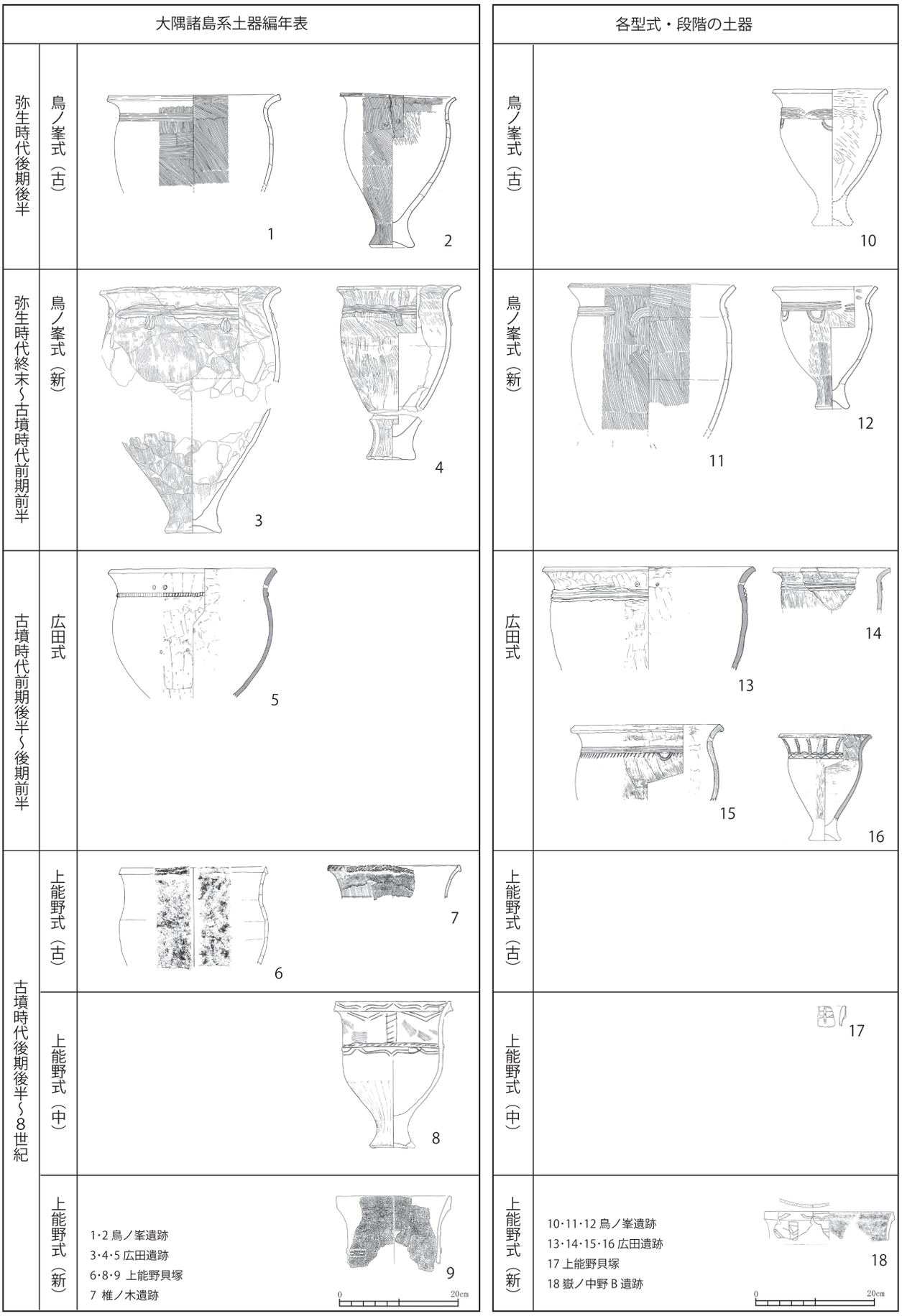

図３　大隅諸島系土器編年

1961)。橋口は、鳥ノ峯遺跡の土器をⅠ・Ⅱ・Ⅲ期に細分し、その時間幅を弥生時代後期後半～古墳時代初頭とした。新里は、鳥ノ峯遺跡出土土器のうち、中津野式土器と共伴する一群をⅣ期新段階（鳥ノ峯式新段階）と捉え、型式学的な序列からより古いと判断されるⅣ期古段階（鳥ノ峯式古段階）とに細分している（新里1999、2009)。

まず、鳥ノ峯遺跡、広田遺跡北側墓群における在地の甕形土器と埋葬遺構における搬入品、副葬品、貝製装身具との共伴関係並びに埋葬遺構の特徴、墓群の時期から、鳥ノ峯式の編年と位置づけについて検討する。

鳥ノ峯遺跡の墓群は、埋葬遺構に共伴する搬入土器の年代と埋葬遺構・副葬品・装身具の特徴から、より古い段階の鳥ノ峯遺跡第2次調査地点と、より新しい段階の第3次調査地点に大きく分けられる（図２)。第２次調査地点からは、15基の覆石墓と15体の人骨が確認されている。この墓群における搬入土器は、壺が２点知られる。埋葬遺構に伴う供献土器としては、第２次調査10号墓から出土した松木薗式とみられる壺（図２-４）がある。また、墓域内から河森編年Ⅱ期（松木薗式並行)、球磨川流域編年の３期（河森1998）の免田式重弧文長頸壺（図２-２）が出土しており、弥生時代後期後半に位置づけられる。但し、搬入土器と在地の土器が埋葬遺構単位で共伴した事例はなく、同時期とみられる墓群に伴うという広い意味での共伴関係となる。この墓群は、平面プラン、積石の配列などの規格性が高い覆石墓、在地の甕型土器・搬入品の壺のどちらかのみの供献、貝製品を伴わないなどの特徴があり、第２次調査地点とは時期差が想定され、搬入土器の年代から弥生時代後期後半を中心とする時期の墓群であることが分かる。こうした古手の特徴を持つ第２次調査14号墓に供献されていた大型の甕形土器（図３-１）と小型の甕形土器（図３-２）及び第２次調査12号墓に供献された小型の甕形土器（図２-７・８)、図２-５の小型の鉢形土器などが、この墓群から出土した免田式重弧文長頸壺、松木薗式壺と同時期の在地の土器と考えられる。

なお、盛園は、第１次調査３号墓から出土した小型の甕形土器（図４-１）を弥生時代中期末、橋口は鳥ノ峯のもっとも古い段階（橋口編年Ⅰ期）のものと捉え、図３-１・２、図２-７・８などよりも古く位置づけている。だが、第１次調査地点からは、時期を推定することのできる搬入土器、貝製品等は出土しておらず、墓制等からも第２次調査地点との時期差を明確に示すことはできない。また、本資料は、口縁部と胴部が接合しないなど型式学的な検討も難しく、一段階古くみる根拠に欠ける。

よって、現状で、大隅諸島系土器の中で、共伴関係などから年代を知りうる、もっとも古い一群は、第２次調査地点に伴うこれらの資料であるといえよう。

鳥ノ峯遺跡第３次調査地点の覆石墓は、第２次調査のそれと較べ明らかに平面プラン、積石の配列、選択される石材などの規格性が失われている。供献される搬入土器は中津野式の壺であり、一部の人骨が貝製品を着装するなど、第２次調査地点より新しい時期の墓群といえる。

墓群の東端に位置する３次調査10号墓では、搬入品である中津野式の壺に在地の甕形土器（図２-14・15、図３-11、12）が共伴している。広田遺跡北側墓群北区２号墓でも供献された中津野式新段階の壺に大型・小型の甕形土器（図３-３・４）が共伴する。

この２例では、大型・小型の在地の甕形土器が供献され、搬入品の壺形土器が供献される。広田遺跡北区２号墓の甕形土器（図３-３・４）は、みかけ多条突帯下端に接して長方形の貼付文を施し、その貼付文に数条の沈線（刻み目）を伴うものである。これらの特徴をもつ甕形土器は、田之脇遺跡出土資料や鳥ノ峯遺跡表採品にも類例を見出すことができる。また、前後の段階には認められず、この段階に隆盛するものである可能性が高い。また、鳥ノ峯第３次調査10号墓の大型の甕形土器（図３-11）は、みかけ多条突帯が始点と終点で連結せずに、すれ違うなど成川式の影響も看取される。

北区２号墓の埋土から出土した炭化物の年代は、布留１式並行の年代を示す（藤尾2007）。中津野式は、中村編年によれば庄内式に並行する（中村1987）。また、中津野式新段階は、河森編年の鹿児島４期に対応し、河森編年Ⅳ期（本目Ⅳ段階）、布留０～１式並行とされ（河森1999）、北区２号墓は、弥生時代終末期～古墳時代前期前半の時間幅の中で理解が可能である（石堂2012）。

このように、鳥ノ峯遺跡から出土する土器は、後述する広田式と並行する時期の土器群を含めると、共伴関係などから３段階に分けることができる。広田式と並行する土器群を除いた２つの段階について、免田式重弧文長頸壺から時期を伺える第２次調査地点の甕形土器に代表される土器群を鳥ノ峯式古段階、中津野式の壺と共伴する、鳥ノ峯遺跡第３次調査10号墓及び広田遺跡北側墓群北区２号墓に代表される在地の甕形土器（図３-３・４・11・12）の型式を鳥ノ峯式新段階と呼称したい[(1)]。

４．広田式土器

広田式は、盛園により広田遺跡南側墓群出土の甕形土器を鳥ノ峯式に後続するものとして、設定された型式である（盛園1961）。盛園は、後に、鳥ノ峯式のうち第1次調査出土土器（図２-１）を中期末、第２・３次調査出土土器を弥生時代後期から古墳時代前期に位置づけなおす過程で、広田遺跡出土の土器（広田式）は、鳥ノ峯式の第２・第３次調査資料の範疇に含まれるもの（橋口編年鳥ノ峯Ⅱ・Ⅲ式）と捉えなおしていて、以後用いていない。（盛園1987、2003）。しかし、広田式段階の土器は、鳥ノ峯遺跡よりもむしろ広田遺跡に良好な一括資料が存在し、標式となりうる。そこで、まず、盛園が広田式と設定した広田遺跡南側墓群出土土器のうち、出土状況から帰属する時期を求めうる資料について、その編年的な位置づけを考察したい。

広田遺跡南側墓群の時期は、層位により大きく上層期・下層期に分けられる。下層期はさらに、下層タイプｉ貝符で示される下層期・古段階、下層タイプⅱ貝符で示される下層期・新段階に細分され、下層期・古段階は、弥生時代後期後半～古墳時代前期の時間幅をもつとされる（木下2003）。2004年～2005年に実施した広田遺跡の発掘調査において、筆者らは、下層期・古段階の切り合い関係をもつ埋葬遺構の層位的な発掘成果から、下層期・古段階を古相と新相に細分した。その時期については、広田遺跡下層期・古段階古相を弥生時代終末期～古墳時代前期、下層期・古段階新相を古墳時代前期～中期とした（石堂2012）。

広田遺跡南側墓群では、埋葬遺構が重層的に形成されているため、より新しい時期の造墓行為によって、本来埋葬遺構に供献されていたとみられる土器が、広い範囲に散乱するかのような出土状況となっている、と認識されている（中村2003など）ため、埋葬遺構における他の遺物との共伴を根拠に時期を決めることが難しいとされてきた。

図３-５は、大型の甕形土器で、その出土状況は、AⅣ地区、ＡＶ地区、ＤＩ地区の石積、ＤＩ地区5号人骨周辺にかけて破片が散在するものであった。このうち、ＤＩ地区５号人骨からは、積み石の間や直下から土器が計38点出土したことが報告されている。ＤＩ地区５号人骨は、規格性の失われた覆石墓を伴う埋葬遺構で、図３-５は覆石墓を構成する積み石の間や直下から出土した可能性が高く、破砕された後に供献された土器であった可能性がある。盛園は、広田遺跡の埋葬に伴う土器の出土状況について、「すでに割って捨て、わずかな小片を散布した」ものとする見方を示している（盛園1987）。

こうした破砕土器供献について、埋葬遺構の重複がなく、埋葬段階の様相がより明らかな鳥ノ峯遺跡からみてみよう。図３-５は、特徴的な１条刻み目突帯が巡るもので、類似する資料として、鳥ノ峯遺跡第３次調査５号墓に供献された甕形土器（図２-16）が知られる。図２-16は、報告者により、

「破砕されて供献されたような状態で出土しており、石組の周辺に小片として散在する（橋口1996）」といった出土状況であったことが指摘されている。この土器を観察すると、接合しあう破片の接合面を境にして、受熱による色調の違いが認められる。第３次調査５号墓では、覆石墓上での燔火の痕跡が確認されていることから、破砕供献後に、一部の破片のみが燔火によって受熱したと考えられ、この段階に破砕土器供献の習慣があったことを示唆する。また、第２次調査７号墓に供献された在地の甕形土器（図２-６）にも、同じように接合しあう破片の接合面を境にして、受熱による色調の違いが明瞭に認められ、破砕土器供献の可能性が高い[(2)]。広田遺跡出土土器のほとんどが破片資料で、広く散在するかのような出土状況であったことは、重層的に埋葬遺構が形成されたことにも一因はあろうが、鳥ノ峯遺跡にみられるように広田遺跡下層期・古段階の時期に、埋葬習俗として破砕土器供献の習俗が存在したことを示唆する[(3)]。

図３-５、図２-16に特徴的な１条刻み目突帯は、大隅諸島系土器の系譜にはなく、中村は、南九州の後期以降の壺・甕に認められる１条刻み目突帯の属性を取り込んだものとみている（中村2003）。松﨑は、成川式において、甕形土器に刻目突帯が出現する時期は、東原式段階と指摘し、辻堂原式段階では、過半数の甕に施される（松﨑2014）ことを指摘している。大隅諸島で１条刻み目突帯が施される在地の甕形土器は東原式の影響のもとに成立した可能性が高く、その出現する時期は、南九州・東原式に並行する時期とみられる。なお、一条刻み目突帯を有する甕形土器は、本村丸田遺跡などからも出土していて、新里による本村丸田遺跡段階は、これらの土器を指すとみられ、鳥ノ峯遺跡新段階に後続する型式として位置づけられている（新里2009）。

図３-５が供献されたＤＩ地区５号人骨の上部構造は、覆石墓である。覆石墓は、広田遺跡南側墓群の墓制としては古い段階のもので、下層期・古段階古相に特徴的なものである。ＤＩ地区５号人骨は、地山を掘り込み、墓坑を形成しているが埋土は新鮮砂層であり、下層期・古段階古相の中でも時期的に新相に近いものとみられる。

図３-15は、広田遺跡南側墓群のＡＶ地区、AⅦ地区、Ａ地区11号人骨上、ＤＩ地区の石囲中、DⅣ地区６号人骨、DⅣ地区にかけて破片が散在していた土器である。図３-５、図２-６と同じく胴部下半がなく破砕土器供献の可能性がある。Ａ地区11号人骨及びDⅣ地区６号は、共に規格性の失われた覆石墓であり、報告文によると、Ａ地区11号人骨からは石組構造の中から土器片５点が出土している。DⅥ地区６号人骨からは土器片１点が伴出しているが出土状況の記載はない。Ａ地区11号人骨、DⅥ地区６号人骨は、いずれも規格性の失われた覆石墓をもち、覆石墓や着装されていた貝製品から、下層期・古段階古相にあたるものの、ＤＩ地区５号人骨に伴う土器片は38点を数え、出土状況からも同遺構に伴う可能性が高いことに対し、Ａ地区11号人骨に伴うものは土器片５点であり、本遺構に伴うものかどうか注意を要する。

図３-13は、ＤⅡ地区、ＤⅢ地区、ＤⅢ地区２号人骨の直上で出土したものである。ＤⅢ地区２号人骨の上部構造は配石墓で、下層タイプｉの貝符とガラス小玉などを着装する。着装していたガラス小玉はBDⅡ型に分類され（大賀2003）古墳時代中期前半を中心とする時期に比定され、下層期・古段階新相にあたる。ＤⅢ地区２号人骨における土器の出土状況については記載がなく、図３-13が埋葬遺構に伴うものであるかは注意を要するものの、ＤⅡ地区、ＤⅢ地区、ＤⅢ地区２号人骨と散在する出土状況は、破砕土器供献の結果とみられ、図３-13はＤⅢ地区２号人骨に伴うものである可能性が高い。

このように広田遺跡南側墓群の土器のうち、覆石墓・配石墓に供献されていたとみられる一群は、広田遺跡下層期古段階古相の中でも新しい段階から新相にかけての時期となる。表面採集品を含めて、

広田遺跡南側墓群では中津野式新段階（布留０～１式並行）の壺の供献習俗が認められないこと、ＤⅠ地区５号人骨は、地山を掘り込み墓坑とするものの、埋土は新鮮砂層であり、下層期・古段階古相の中でも新しい段階と考えられること、下層期古段階新相のＤⅢ地区２号人骨に伴うガラス小玉の時期が、古墳時代中期前半とされることから、これらは、古墳時代前期後半から中期前半の時間幅で理解可能であろう。

なお、広田遺跡南側墓群では、下層期・新段階や上層期における土器供献の習俗は確認されていないため、下層期・新段階に相当する時期の大隅諸島系土器の様相について、共伴関係により推し量ることが現状では難しい。図３-16は、広田遺跡南側墓群では数少ない[(4)]小型の甕形土器であり、中園編年の３型式、新里編年のＶ期にあたる。広田遺跡南側墓群 A-Ⅰ地区から出土しているが、出土状況の記載はなく、出土層位も不明である。口縁部の形態は、広田式に近いものの、縦位２条の細沈線文の間に横位の沈線文が連続し施されるその文様は、上層貝符との関連性が認められる。類例がほとんどなく、明確な位置づけは困難であるが、これらの属性から、上能野式と広田式の間（山野編年7類並行）に位置づけられる可能性が高い。

このように、広田式は、広田遺跡・下層期段階にほぼ並行し、下層貝符との共時性が認められる。

５．上能野式土器

上能野式は、河口によって、上能野貝塚出土の甕形土器を標式に設定された型式で、次の特徴をもつものとされる。中形の釣鐘形の甕形土器、上げ底の充実した脚台、口縁部は肥厚して断面三角形で、文様は箆書きによって、二並行線、山形文とその変形文などが認められ、幅の狭い凸帯を有し、刷毛目調整が施される（河口1973）。なお、盛園による輪之尾式は、口縁部の肥厚化、特徴的な突帯、箆書文などから設定したもので、河口の上能野式の範疇で理解可能である。

上能野貝塚は、河口による概報のみで、正式な報告がされていなかったが、2019年に西之表市教育委員会により正式報告がなされた。従来、上能野貝塚出土の土器は、河口により、（上能野式の）「単一型式に限られる」とされてきたが、上能野貝塚出土土器の口縁部の形態は、上能野式・古段階、上能野式・中段階、上能野式新段階の３段階に細分が可能である（石堂2015、図４）。上能野式・古段階は、口唇部の内外面を被うように粘土帯を貼り付けることで、意識的に口唇部を肥厚化させ、内面には、貼り付けた粘土帯を調整等で隠そうともせずに、その貼り付け痕が明瞭に認められる。上能野式・中段階では、口縁部外面に粘土帯を貼り付けることで肥厚化させ、断面は三角形を呈する。上能野式・新段階では、口縁部端部に明瞭な平坦面をつくりだし、断面が台形状を呈する。その平坦面に列点文を施すものなどもあり、口縁部はまっすぐ立ち上がる点も特徴的である。

なお、大隅諸島系土器の中に、こうした三段階の口縁部形態の変遷が認められることは、新里により指摘がなされている（新里1999、2009）。新里の椎ノ木遺跡段階が上能野式古段階、上能野式が上能野式中段階、嶽ノ中野Ｂ遺跡段階が、上能野式新段階にあたる。また、川口は、大隅諸島系土器について口縁部の形態からⅠ～Ⅴ類に分け、上能野式をⅢ～Ⅴ類に対応させた。その上で上能野式の影響が認められる大隅半島の笹貫式、奄美大島の兼久式の年代観から、川口分類Ⅳ類（上能野式中段階）を６世紀末～７世紀中頃、川口分類Ⅴ類（上能野式新段階）を７世紀中頃から９世紀前

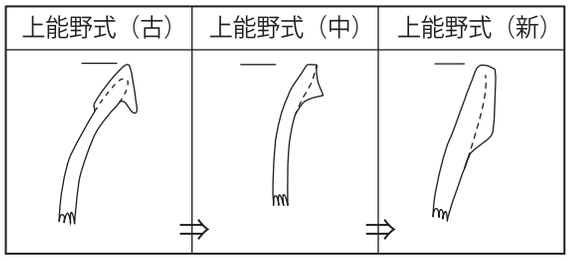

図４　上能野式の型式変化

半とした（川口2019）。

盛園は、土器の型式を根拠に、鳥ノ峯式→広田式→輪之尾式（上能野式）の変遷を想定し（盛園1961）、河口もまた、上能野式を鳥ノ峯式に後続する時期としている（河口1973）。上能野貝塚は、上能野式の単純遺跡で上層タイプの貝符（以下、上層貝符）、広田遺跡・上層期に特有のゴホウラ貝釧である突起型ゴホウラ貝釧と包含層内で共伴していることから、上層貝符との共時性が認められる。

上能野貝塚では、型式学的に認められる古・中・新の各段階の時期について、層位的な、または共伴関係によって推し量ることは難しい。そこで、馬毛島椎ノ木遺跡出土の上能野式について検討したい。

先述したとおり、大隅諸島において葬送に伴う土器供献の習慣が確認されているのは、広田遺跡下層期・古段階までであり、下層期・新段階以降で明確なものは知られていない。椎ノ木遺跡出土の土器（図３-７）は、口縁部の形態から、上能野式古段階にあたる。椎ノ木遺跡の埋葬遺構は、貝塚とみられる包含層の下部で検出されており、埋葬遺構に伴う可能性があると報告された土器は破片２点だけで、大部分は、埋葬遺構以後に形成された貝塚層に伴い出土している。つまり、椎ノ木遺跡出土の土器は、層位的に埋葬人骨より新しいとみてよい。椎ノ木遺跡の埋葬人骨が着装していた貝製品は、その組成から広田遺跡下層期古段階新相～下層期新段階に位置づけることが可能である。よって、上能野式・古段階は、広田遺跡下層期段階（≒広田式）より層位的に新しいと考えられる[(5)]。種子島の弥生時代中期～古墳時代併行期の在地の甕形土器は、南九州の同時期の甕形土器の形態変化と同様に、口縁部が徐々にたちあがる方向へ型式変化をすることが指摘されている（中園1988、新里1999など）。また、広田式にあたる図３-15・16からは、口唇部を拡張させる変化がみられ、上能野式・古段階、中段階、新段階へと口縁部の肥厚化へ向かう型式変化が看取されることと矛盾せず、上能野式は、古→中→新と型式変化するとみられる。

６．大隅諸島系土器の編年

本稿では、主に埋葬遺構に伴う共伴関係及び一定の一括性の認められる資料から、大隅諸島系土器の編年について検討を行った。表１はこれらをまとめたものである。

大隅諸島系土器のもっとも古い段階は、鳥ノ峯式古段階とした、弥生時代後期後半の免田式重弧文長頸壺、松木薗式壺を伴う墓群に供献された土器群を標式とする。この段階では、頸部から口縁部の屈曲が強く、口縁部最大径が、胴部最大径を上回り、胴部の屈曲がゆるやかで、全体に縦に長くスマートな印象を与える。

鳥ノ峯式新段階は、弥生時代終末～古墳時代前期前半の中津野式の壺と共伴する一群を標式とする型式である。みかけ多条突帯下端に接して長方形の貼付文を施し、その貼付文に数条の沈線（刻み目）を伴うものは、この段階に属し、胴部の張り出しが強くなり、胴部最大径より、口縁部最大径が大きくなるものもある。

広田式は、広田遺跡南側墓群出土の甕形土器を標式とするが、狭義の広田式は、下層期・古段階古相の新しい段階から新相にかけての埋葬遺構に共伴する甕形土器を標式とし、下層タイプｉ貝符と共時性をもつ。一条刻目突帯を有するものがあり、口縁部最大径より胴部最大径が膨らむものが多く、横長で寸胴な印象にかわる。その時期は、古墳時代前期後半から中期前半に位置づけられる。

下層期・新段階の埋葬遺構に土器が共伴する事例はなく、この段階の大隅諸島系土器の様相は判然としないが、上層貝符類似文が施され、下層期・新段階の中でも、もっとも新しい段階と並行する時期のものとみられる小型の甕形土器が知られ、広義の広田式はこの段階までを含む。下層期・新段階

表１　大隅諸島の土器編年表

<table>
<tr><th>年代
AD</th><th colspan="2">時期区分</th><th>土器型式
（本論）</th><th colspan="2">大隅諸島の
埋葬遺構の編年
（木下2003，石堂2012）</th><th>共伴
遺物</th><th>南九州の
土器型式</th><th>土器型式
（新里2009）</th></tr>
<tr><td rowspan="2">250</td><td rowspan="2">弥生時代</td><td>後期
後半</td><td>鳥ノ峯式
古段階</td><td colspan="2">鳥ノ峯遺跡
第2次調査</td><td>免田式</td><td>松木薗式・高付式</td><td>鳥ノ峯式
（古）</td></tr>
<tr><td>終末期</td><td rowspan="2">鳥ノ峯式
新段階</td><td>広田遺跡
北側墓群
段階</td><td>鳥ノ峯遺跡
第3次調査</td><td>中津野式</td><td rowspan="2">中津野式</td><td>鳥ノ峯式
（新）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">300</td><td rowspan="4">古墳時代</td><td>前期</td><td rowspan="3">広田式</td><td rowspan="2">広田遺跡
下層期
古段階</td><td rowspan="2">鳥ノ峯遺跡
第3次調査</td><td rowspan="2">下層タイプ
ｉ貝符</td><td rowspan="2">東原式</td><td rowspan="2">本村丸田
遺跡</td></tr>
<tr><td rowspan="2">400</td><td rowspan="2">中期</td><td rowspan="2">椎ノ木
遺跡</td></tr>
<tr><td rowspan="2">450</td><td colspan="2">広田遺跡
下層期
新段階</td><td>下層タイプ
ⅱ貝符</td><td rowspan="2">辻堂原式</td></tr>
<tr><td rowspan="2">500</td><td rowspan="2">後期</td><td rowspan="2">上能野式
古段階</td><td colspan="2">移行期</td><td rowspan="3">上層タイプ
貝符</td><td rowspan="3">笹貫式古段階</td><td rowspan="2">上能野式</td></tr>
<tr><td rowspan="3">600</td><td rowspan="3">広田遺跡
上層期</td></tr>
<tr><td rowspan="2">古代</td><td>上能野式
中段階</td><td rowspan="2">嶽ノ中野B
遺跡</td></tr>
<tr><td>700</td><td>上能野式
新段階</td><td>笹貫式新段階</td></tr>
</table>

※南九州の土器型式については、中村1987を基に、近年の成川式土器研究の成果をとりいれ参考として示した。

の年代については、列点文を有するゴホウラ貝釧で時間的な定点をおさえられる。広田遺跡出土の列点文ゴホウラ貝釧は、Ｅ３号人骨、ＥＸ地区２号人骨に伴う。Ｅ３号人骨からは下層タイプⅱの貝符に類似する文様が施されるイモガイ貝釧が伴い、下層期・新段階の埋葬遺構であることがわかる。列点文を有するゴホウラ貝釧は、岡山県牛塚古墳・大分県世利門古墳・熊本県伝左山古墳などに類例がある。牛塚古墳の墳頂付近からは、川西編年Ⅳ群古相（TK73-216型式並行）の円筒埴輪が出土している。また、世利門古墳は、出土鉄器から橋本によりTK73型式前後（橋本2018）とされる。このことから、下層期・新段階はTK73-216型式段階（古墳時代中期中葉）に時間的な定点が与えられる。また、列点文ゴホウラ貝釧とゴホウラ円型狭型・広型が共伴するＥＸ地区２号人骨は、木下によって下層期・新段階でも新しい時期に位置づけられていて（木下2014）、この段階（≒山野編年６類）まで列点文を施文する風習が残るとみられる。また、木下は、TK23型式期を中心とする時期とされる熊本県伝左山古墳で列点文ゴホウラ貝釧とより新しい繁根木型ゴホウラ貝釧が共に出土することから、列点文ゴホウラ貝釧の上限をTK23型式頃（古墳時代中期後葉）とみていて、肯首される（木下

2014)。また、山野は、下層期・新段階と上層期の間に、移行期が存在することを指摘している（山野2012、山野2019)。図３-16（中園編年３型式、新里編年Ⅴ期）は、共伴関係から論ずることは難しく、本論においては段階分けを行っていないが、型式学的には分類が可能であり、山野編年７類に並行する時期に位置づけられるとみている。この移行期の年代幅をどれくらいみるかは根拠に欠けるものの、移行期を含めた下層期・新段階の下限は、沖縄諸島で、開元通宝に伴い上層貝符が出土することを考えれば、古墳時代後期前半頃とみられ、移行期段階の一群を含む広義の広田式の下限も同時期と考えられる。

上能野式は、広田遺跡・下層期より層位的に新しく、上能野式の単純遺跡である上能野貝塚における上層貝符・ゴホウラ突起型との共伴関係と上層貝符の文様との類似性から、広田遺跡上層期に並行する時期に位置づけられる。

上能野式は、上能野貝塚出土土器の口縁部形態の型式学的検討から、上能野式古段階→上能野式中段階→上能野式新段階へと変遷することが想定される。上能野式の各段階における共伴例は知られてないため、その時期を推し量ることは難しいが、川口によって、志布志市宮脇遺跡出土の縦位の貼付文を有する甕形土器の口縁片について、上能野式との関連性が指摘されている（川口2019)。川口・相美が指摘するように、縦位の貼付文は、現状では、九州島に類例はなく、上能野式ないしは兼久式の影響によるものと理解される。この資料は、相美編年（相美2014）の６世紀末～８世紀の笹貫式に伴うものとされ、縦位の貼付文は、上能野式中段階以降の特徴であることから、上能野式中～新段階は、６世紀末～８世紀の時間幅で理解することが可能である。なお、広田遺跡からは、出土地点は不明だが、大賀によりBWⅣ型に分類されたガラス小玉が出土していて、TK209型式段階前後のものとされている（大賀2003)。このガラス玉の存在は、広田遺跡上層期が少なくとも６世紀末～７世紀初頭前後の年代を含むことを示しており、矛盾しない。

大隅諸島は、８世紀初頭の多禰国の設置により律令体制に取り込まれ、西之表市大田遺跡では、８世紀後半の須恵器が出土している。律令制が浸透する中で段階的に律令的な土器様式が主体となっていくとみられ、上能野式の下限は８世紀を含むと考えられる。

７．結語

以上の検討から、埋葬遺構における共伴関係を中心に大隅諸島系土器の編年と位置付けを行った。大隅諸島系土器の特徴と編年をまとめると、以下のようになる。

・大隅諸島系土器は、南九州の土器型式との共通性よりも、その独自性が強くなる弥生時代後期以降の大隅諸島の土器様式をさし、大型・小型の甕形土器と小型の鉢からなり、壺・高杯などの器種が欠落する点に特徴がある。

・大隅諸島系土器は、鳥ノ峯式、広田式、上能野式に大別され、鳥ノ峯式は、覆石墓制、広田式は、下層貝符（広田遺跡・下層期)、上能野式は上層貝符（広田遺跡・上層期）との共時性が認められる。

それぞれの型式は、共伴関係と型式学的検討によって、下記の細分が可能である。

・鳥ノ峯式古段階（弥生時代後期後半）
・鳥ノ峯式新段階（弥生時代終末期～古墳時代前期前半）
・広田式（古墳時代前期後半～後期前半）
・上能野式古段階（古墳時代後期後半～６世紀末）
・上能野式中・新段階（６世紀末～８世紀）

本稿では、共伴関係を中心として甕形土器の型式変遷に力点を置いたため、型式学的な検討と様式

論的な議論が充分行えていない。特に、広田式は下層貝符、上能野式は上層貝符との共時性が認められ、後者においては、文様における共通性が伺えるだけでなく、兼久式など他地域との並行関係を考えるうえでも、型式学的な議論が深まることが期待されている。今後の課題としたい。

註

(1) 私は、これまでの論考（石堂2015・2019）で、広田遺跡北側墓群段階を広田式古段階、広田遺跡南側墓群段階を広田式新段階と呼称してきた。しかし、広田遺跡北側墓群は、2004-5年の発掘によって新たに発見された墓群であり、盛園が鳥ノ峯式、広田式を設定した当時は存在していない。盛園のいう広田式は、広田遺跡南側墓群資料をさし、広田式新段階、古段階という呼称は、広田遺跡南側墓群出土土器の細分と誤解されかねない。また、広田式古段階の土器は、鳥ノ峯遺跡第3次調査地点にも見出せ、学史的にも、それらの土器に対する編年的な位置づけが議論されてきた（橋口編年Ⅱ期など）。よって、本論より広田遺跡古段階を鳥ノ峯遺跡新段階と呼び変え、広田式新段階を広田式と呼称したい。

(2) 第２次調査７号墓に供献された在地の甕形土器（図２-６）は、胴部下半を欠き、接合しあう破片の接合面を境にして、受熱による色調の違いが明瞭に観察される。この埋葬遺構からは、明瞭な燔火の痕跡は報告されていないものの、焼骨が確認されており、同様に破砕土器供献された後に、一部の土器片が受熱したものと考えられる。また、口縁部の立ち上がりが緩く、口縁部最大径より胴部最大径のほうが大きいなど、型式学的に図３-５などの広田式段階のものに類似する。第２次調査７号墓は、第２次調査地点の他の覆石墓と異なり、覆石墓の規格性が失われており、シャコ貝が置かれるなど様相が異なる。これらのことから、第２次調査７号墓は第２次調査地点の中でも例外的に広田式の時期の埋葬遺構である可能性が高く、図２-６は広田式に相当するとみられる。

(3) 鳥ノ峯遺跡第３次調査地点は、中津野式壺を伴い、立石を伴う覆石墓、貝製装身具を伴わない等に特徴づけられる第３次調査10号墓を中心とし展開する墓群と、搬入土器の供献習俗がなく、広田遺跡南側墓群と共通する破砕土器供献の習俗、貝製装身具の着装が認められる第３次調査５号墓を中心とし展開する墓群とが、時期を異にし存在するとみられる。

(4) 他に、広田遺跡南側墓群における数少ない小型の甕形土器として図3-14が知られる。図３-14は表面採集品であり、共伴関係から時期を伺うことが困難である。ここでは、広田遺跡南側墓群における出土土器がほぼ広田式に限定されることと、胴部の膨らみが弱く、直線的となる器形から伺える上能野式の小型甕への型式学的な連続性を重視し、広田式に位置づけている。なお、同資料は、新里編年では鳥ノ峯式古段階に位置づけられていて、型式学的な検討からは、口縁部の屈曲度合の変化の方向性や土器の持つ胎土、調整などの雰囲気から、鳥ノ峯式古段階として捉える解釈もなりたつ。

(5) これまでの論考（石堂2015、2019）では、椎ノ木遺跡出土土器を埋葬遺構に供献された土器と捉えていたため、下層期・新段階に並行する時期に位置づけていたが、訂正したい。

文献

旭慶男 1975「種子島における弥生式土器」『鹿児島大学考古学研究会紀要1』pp.1-19

石堂和博 2010「南西諸島の貝文化と海人－種子島広田遺跡を中心に－」『よくわかる考古学』pp.194-197

石堂和博 2012「種子島広田遺跡における葬制」『沖縄考古学会研究発表会発表要旨』pp.15-21

石堂和博 2015「古墳時代後期並行期～奈良時代における九州本土と大隅諸島の交流～古墳時代後期並行期から奈良時代における大隅諸島の様相を中心に～」『平成27年度　第６回　奄美考古学会（種子島大会）研究発表資料』奄美考古学会

石堂和博 2019「古墳時代後期並行期から８世紀における大隅諸島と九州本土及び奄美、沖縄諸島との交流」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』pp.99-110　奄美考古学会

河口貞徳 1973「上能野貝塚発掘概報」『鹿児島考古7』pp.59-68 鹿児島考古学会

川口雅之 2019「大隅諸島上能野式土器の年代及び兼久式土器成立の背景について」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』pp.83-95 奄美考古学会
河森一浩 1998「免田式土器の再検討」『肥後考古』11 pp.13-25 肥後考古学会
河森一浩 1999「重弧文土器の終焉－中・南九州における古墳時代初頭前後の一動向－」『文化学年報48』pp.59-83
木下尚子 2003「広田遺跡出土土器の編年」『広田遺跡』pp.297-299 広田遺跡学術調査研究会
木下尚子 2014「繁根木型貝釧考－伝左山古墳出土貝釧紹介と繁根木型貝釧の成立－」『考古学雑誌98-4』pp222-253
木下尚子 2019「小湊フワガネク遺跡と広田遺跡－奄美大島の鉄器導入期の考察－」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』pp.162-164 奄美考古学会
熊本大学文学部考古学研究室 1980『馬毛島埋葬址－西之表市椎ノ木遺跡－』研究室活動報告６
相美伊久雄 2014「南九州東端域における７～８世紀の土器様相－志布志湾北岸域の甕型土器を中心に－」『Archaeology from the south Ⅱ 新田栄治先生退職記念論集』pp.221-238
志布志町教育委員会 2001『宮脇遺跡』
新里貴之 1999「南西諸島における弥生並行期の土器」『人類史研究11』pp.81-87 人類史研究会
新里貴之 2009「貝塚時代後期文化と弥生文化」『弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭』pp.148-154 同成社
新里貴之 2015「南西諸島の土器と成川式土器」『成川式土器ってなんだ？－鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器－』pp.31-38
中園聡 1986「屋久町栗生出土の遺物について（2）－種子島広田遺跡の年代をめぐって－」pp.1-6. 『鹿大考古学会会報第2号』
中園聡 1988「土器様式の動態 古墳の南限付近を対象として」『人類史研究７』
中村直子 1987「成川式土器再考」『鹿大考古第６号』pp57-73
中村直子 2003「広田遺跡出土土器の位置づけ」『広田遺跡』広田遺跡学術調査研究会 pp.301-308
中村直子 2004「貝符に類似する土器文様の検討」『東南アジア考古学会研究報告 第2号 島嶼地域の諸相』pp.19-30
西之表市教育委員会 1995『嶽ノ中野Ｂ遺跡』
西之表市教育委員会 2019『内城址・上能野貝塚 西之表市内遺跡発掘調査等事業に伴う発掘調査概報』
橋口達也 1996『中種子町埋蔵文化財調査報告書（2）種子島鳥ノ峯遺跡』
橋口尚武 1992「種子島の考古学的研究 - その基礎資料（1）」『乙益重隆先生古稀記念論文集九州上代文化論集』
橋本達也 2018「古墳と南島社会－古墳時代における南の境界域の実相・広域交流・民族形成－」『国立歴史民俗博物館研究報告第211集』 pp.411-446
南種子町教育委員会 1986『本村丸田遺跡』
肥塚隆保・隆幡順子・大賀克彦・矢持久民枝「広田遺跡出土玉類の考古科学的調査」『広田遺跡』広田遺跡学術調査研究会 pp.372-375
藤尾慎一郎・遠部慎 2007「鹿児島県南種子町広田遺跡出土炭化物の炭素14年代測定」『広田遺跡』pp.199-207
松﨑大嗣 2014「成川式土器と土師器の折衷型－指宿市敷領遺跡十町地点出土の資料を中心に－」pp.205-220『新田栄治先生退職記念論文集』
盛園尚孝 1955「鹿児島県熊毛諸島の弥生文化」『古代学研究12』pp.385-393
盛園尚孝 1961「種子島中種子町に発見された覆石墓について」『種子島民俗13』 pp.25-30
盛園尚孝 1987「熊毛諸島の先史時代」『南種子町郷土誌』南種子町 pp.435-441
盛園尚孝 2003「広田遺跡出土土器の編年」『広田遺跡』広田遺跡学術調査研究会 pp.297-299
山野ケン陽次郎 2012「種子島広田遺跡の再検討」『古代文化第63巻第4号』pp.476-496
山野ケン陽次郎 2019「先史琉球列島における広田上層式貝符の研究」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』pp.169-184